一力 健治郎 ―東北の発展を願って―

一力健治郎

一力健治郎は、江戸時代の終わりごろの文久三（一八六三）年、仙台の唐物商の四男として生まれました。八歳のとき、茶商一力家のあとつぎとなるため養子となりました。健治郎は、時代が江戸から明治に大きく変わり、外国から新しい文化が入ってくる中で成長しました。

明治時代のはじめ、仙台藩は戊辰戦争で敗れたことにより、県の重要な役職や警察の仕事などは、戦争に勝った他県の人が務めることになりました。政府の人たちからは、「白河以北一山百文」と言われていました。「白河以北一山百文」というのは、白河から北の地域、つまり東北地方は、「一山百文」程度しか値打ちがないという意味です。

幼いころから負けずぎらいだった健治郎は、この言葉がくやしくて、何とか見返してやりたいという気持ちでいっぱいでした。

二十歳になった健治郎は、一力家の家業をつぎ、熱心に働き、店も順調でした。結婚し、子どもも生まれました。しかし、家族との暮らしに幸せを感じていたものの、一方で世の中がどんどん姿を変えるのを目の当たりにしていました。今の世に何が必要なのか、自分に何ができるのかを考え、学校に行って勉強したいと思うようになりました。そこで健治郎は、二十二歳で東華学校（現在の仙台第一高等学校）に入学し、二十四歳で第二高等学校（現在の東北大学）に入学しました。健治郎は家をはなれ、自ら寄宿舎に入るなど熱心に勉強にはげみました。

唐物…中国やその他の外国から日本に入ってきたもの。

茶商…お茶をあつかう商売。

戊辰戦争…一八六八年から次の年まで行われた新政府軍（薩摩・長州）と旧幕府軍（会津等）の戦い。

寄宿舎…学生がいっしょに生活をするための建物。

さらに日本の中心である東京で新しい情報や人々の生活の様子を直接に学びたいと考え、二十六歳で東京の国民英学会にも学びました。

二十七歳でふるさとにもどった健治郎は、「文学館」という外国の本をあつかう書店を開きました。仙台の人々が外国の本を簡単に手に入れることができ、新しい文化を学ぶことができるようにという思いからでした。また、いくつかの会社の社長にもなりました。

しかし、そのころになっても、政府の東北に対する見方は、以前と変わらないものでした。

健治郎は、東北を発展させるためには政治にかかわることが必要と考え、市議会議員そして県議会議員となり、政治家として自分ができることを精いっぱい行いました。

そんなある日、健治郎は県議会議長の藤沢幾之輔から、経営が苦しくなった「東北日報」という新聞社を引き受けてほしいとたのまれました。当時、仙台には発行部数の多い「東北新聞」と歴史のある「奥羽日日新聞」がありました。政党の考えを伝えることを主としていた「東北日報」は二つの新聞に対抗するのが難しかったのです。経営が厳しい新聞社を立て直すのは健治郎しかいないと言われ、健治郎は、しばらく考えこみました。

決断のときは、せまってきています。

「新聞なら広く情報をみんなに伝えることができる。だが、人々は新聞を読んでくれるだろうか。」

健治郎は、つぶやきました。

断ろうかと思ったとき、健治郎の中に「白河以北一山百文」の言葉がうかびました。

（よし。新しい新聞だ。今までにない東北のための新聞を作ろう）

健治郎は新聞社を引き受けることを決心しました。

国民英学会…東京の私立の英語学校。

明治三十（一八九七）年、健治郎三十三歳のときのことです。それまでの県議会議員や植林会社の社長などの仕事を全部やめ、新聞づくりにかけることにしたのです。社名は「河北新報」としました。「白河以北一山百文」という東北を軽く見る言葉に対し、それをはね返そうという強い思いを社名にこめたのです。自分の新聞づくりを通して、東北の見方を変えていきたいと考えたのです。

健治郎は、河北新報の創刊号に自分の考え方を発表しました。

一　正しく、自由公正な新聞をつくる
二　人物、文化、産業を開発し、東北地方の発展に尽くす
三　市民の味方となり、悪い習わしをなくして人々を大切にする

河北新報創刊号（河北新報社蔵）

最初は、なかなか新聞が売れず、経営は困難を極めました。

それでも、健治郎は、思いを曲げず、様々な工夫をしました。

まず、だれでも読める新聞になるように、新聞の値段を一部一銭五厘から一銭に値下げしました。また、当時、仙台で発行されていた新聞は四ページでしたが、健治郎は二ページ増やして六ページにしたり、明治三十二（一八九九）年には、地方紙として初めて英文欄をのせ、文芸欄や家庭欄も作ったりしました。さらには、明治三十三（一九〇〇）年、世の中は毎日活動しているのだから、新聞は休むべきではないと年中無休を宣言し、昭和五（一九三〇）年までの三十年間、一日も休まず新聞を出し続けました。

健治郎は、新聞は時間が命として、遅れたり配達できなくなって読者に迷惑をかけたりすることはできないと考えていました。そのため、毎朝、新聞配達員とともに配達区域の様子を見て回り、体調の悪い配達員の代わりをすることもありました。また、学生の配達員のことをいつも気にかけ、勉強のたしに本代をわたしてはげますこともありました。

当時の一銭…現在の百五十円くらい。

その間に健治郎は、東北の人のためにできることとして、社説に「農奴解放」という問題を取り上げました。当時の東北の農民は貧しく、地主に高いお金をはらって農地を借りて農業をしていました。一生懸命働いても、かせいだお金の大部分が地主のものになってしまうのです。このような国の制度を変えることが必要だと思った健治郎は、思い切って新聞に発表したのでした。しかし、政府の理解を得られず、新聞の販売を一時禁止されることになったのです。それでも、自由公正な新聞を作る、東北地方の発展に尽くす気持ちは失いませんでした。

また、昭和三（一九二八）年には「東北産業博覧会」、昭和八（一九三三年）年には「河北美術展」などの文化事業も始めました。

新聞少年の像

健治郎の情熱は人々の信用を得て、河北新報は多くの人に読まれるようになり、また、東北地方は健治郎が望んだように文化や産業も大きく発展してきました。

現在、河北新報社には、新聞配達の少年の像が建っています。その目は、未来を見すえ、粘り強く着実に前進を続ける東北人そのものでもあるのです。

一カ 健治郎

一カ 健治郎は、文久三（一八六三）年、仙台に生まれた。健治郎は実業家として成功し、宮城県議会議員や仙台市議会議員を歴任した。その後「河北新報」を創業した。現在に至っても、「河北新報」は東北を代表する新聞として、東北の発展に大きく貢献している。

社説…新聞にその新聞を出している会社の意見としてのせる文章。